



平成 22 年 11 年 15 日

長野市長 鷺澤正一 様

社団法人 日本建築家協会 (JIA)
関東甲信越支部 支部長 上浪 寛
同保存問題委員会 委員長 和田昇三
同長野地域会 会長 赤羽吉人

長野市民会館の保存・活用に関する要望書

拝啓 時下ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

貴市におかれましては、日頃より建築文化の継承・発展に理解を示されていることに深く敬意を表します。また、当協会の活動に格別のご理解を賜り厚く感謝申し上げます。

さて、貴市所有の長野市民会館の新築計画に伴い、現長野市民会館を解体する旨の今般の報道に鑑み、以下の要望をいたします。

ご高承のように、現長野市民会館は市制 60 周年記念事業の一つとして 1961 年に建設されました。当時としては長野県初の大ホール (1,816 人収容) を備えた市民会館の建設であり、諸種の全国的な催し物への対応と、周辺市町村の文化的コミュニティーの場としての役割を担い、広く県民にも活用される市民自慢のホールとなりました。今もその役割と機能は変わりなく利用されています。

設計は建築家佐藤武夫 (1899 年生～1972 年没) で、隣接する信越本線に対する遮音対策が外装の煉瓦張りにより図られ、正面ファサードのブロック積みにより西日に直面するホワイエの明るさが抑制されるなど、随所に工夫が施されています。特にホワイエ西側壁の窓はスタンドグラスが使用され、日の光が差し込む時など幻想的な空間に変わり印象に残ります。また、大ホールの屋根は鉄筋コンクリート V 型断面梁の構造で支えられていますが、この V 型断面梁は大空間を作り出すのみならず外観にも印象的に表わされ、煉瓦張りの外壁、ブロック積みのファサード、モニュメントのような高い排気塔などとあいまって、建築物全体が街の風景を形成しています。このように現長野市民会館は多くの市民をはじめ県民にとっての歴史的文化財に値する建築と判断いたします。

私どもは、建築が街の中で景観を形成する役割を担っており、この建築を使い続けることこそ文化や歴史が創られるものと考えています。日本経済の発展に伴って、スクラップ&ビルドの風潮により近代建築が次々と壊されることに反省の気運が高まる中、現市民会館を貴市が使い続けることは大変重要な意味が有ると思います。この建物は現代の建築技術を駆使すれば十分な耐震補強を施すことができるかと推察します。大ホールは舞台や観客席を改修し他のホールとの差別化を図れば質の高い施設へと再生させることが可能と考えます。あるいは、大ホール以外の用途に変更するなど大胆な方法を採用することも一案と考えます。これらの手法によって耐震補強や設備更新などの改修の検討を行い、是非この建築を末長く活用し続けて頂けますようお願い申し上げます。

尚、(社)日本建築家協会関東甲信越支部、同保存問題委員会、同長野地域会は上記実現のためできる限りの協力をさせていただくことを申し添えます。